

## オホーツクの秋鮭と山形の人工ふ化放流 （“めじか”が結ぶサケ広域連携）

猿払村漁協 定置部会

(株)オホーツク活魚 藤本 信治

### はじめに

秋、北海道オホーツク海沿岸の定置網には、ひときわ脂の乗った鮭が漁獲されます。

鮭は生まれた川に近づき成熟する程、鼻が伸びてきますが、この鮭は、未成熟で顔が丸みを帯びているため目と目が近く、“めじか”と呼ばれています。

“めじか”の母川を調査するため、昭和44年に北海道稚内水産試験場が、11月19・20日に定置網で漁獲された50尾を標識放流したところ、北海道の河川では再捕されず、12月上旬に青森県深浦沿岸で3尾、12月中旬に秋田県川袋川で1尾、12月中下旬に山形県月光川で9尾、日向川で1尾がそれぞれ再捕されました。このことから、“めじか”の母川は、本州日本海側の河川、特に月光川水系のふ化場から放流されたものであることが判明しました。このことが周知された昭和50年（1975年）から、“めじか”を縁とした交流が北海道オホーツク沿岸の定置漁業者・ふ化放流事業者と山形県の鮭人工ふ化放流事業者の間で行われるようになり、現在まで続いています。特に平成19年からはこの交流が活発になり、“めじか”の鮭資源を増やすための広域連携へと発展しています。近年その成果として、平成25年（2013年）に山形県でも鮭資源の多い、月光川水系の柘川ふ化場・箕輪ふ化場・高瀬川ふ化場のある遊佐町において、めじか地域振興協議会が設立され、平成29年新柘川ふ化場が北海道北見管内さけ・ます増殖事業協会の技術支援のもと、北海道の進んだふ化技術を取り入れ、まさにサケの広域連携の基地として完成しました。サケ広域連携の意義を唱えられ、推進されてきた柘川鮭漁業生産組合の尾形修一郎組合長は“めじかの故郷”であることを掲げ、強いサケの稚魚を作って回帰率を向上させたいと語っています（写真1）。そしてここで放流した稚魚が地元山形県沿岸で漁獲されるほかに、北海道でも高級鮭“めじか”として漁獲され、利用されることにも期待をかけてくれています。

本年2月5日には、昔“めじか”の標識放流に協力した縁もあり、私共、猿払村漁協定置部会も新柘川ふ化場を視察しました。豊富な鳥海山からの伏流水を湛えた新柘川ふ化場の元気に育っている稚魚を見て、今後のめじか鮭資源の安定・増大に夢が膨らみました（写真2・3・4）。

今回の寄稿では、“めじか”を通じてのサケ広域連携の歴史をたどり、この事業が多くの関係者の情熱と努力によって歩まれてきたこと、またこれから将来の発展へ向けての取り組みを紹介できればと思います。



写真3 豊富な鳥海山からの伏流水を湛える新柘川ふ化場



写真1 新柘川ふ化場落成式で挨拶される尾形組合長



写真2 新柘川ふ化場 めじかの故郷碑の前で



写真4 充実した新柘川ふ化場飼育池

## 究極の銀毛鮭“めじか”とは

通常、日本沿岸で水揚げされる秋鮭は、北太平洋・ベーリング海・アラスカ湾の北洋海域で成長し、成熟した状態で生まれた川に隣接する定置網で水揚げされるのですが、“めじか”は、本州日本海側の河川で生まれた鮭が北洋から母川に帰る回遊の際、未成熟な状態でオホーツク沿岸を回遊して主に定置網で漁獲される鮭であります。

顔は産卵が近い鮭と異なり、丸く、目と目の距離が近い（“めじか”（目近）名前の由来はこのことからきている）のが特徴です。また、体形が脂を蓄えてズックリしていて、鱗がはげやすく、青味がかった黒い地肌が露出していて、お腹の白さが際立っていてとても美しい魚であります（写真5）。

北海道では未成熟な高品質な鮭として、鮭児（ケイジ）やトキシラズ（通称トキサケ）も水揚げされますが、出生地がアムール川などの外国の河川とされており、秋に国産の鮭で最も脂がのった状態で漁獲されるのが“めじか”であります。海外との調整がならず、日本国内で完結する資源であると言えます。

味は程よい天然の脂が美味しく、一旦凍らせるとルイベや刺身や寿司ネタなどの生食にも向きますし、加熱しても塩焼きやしゃぶしゃぶや鍋物の具材等、様々な料理に利用できる高級食材であります。



写真5 めじか（目近）鮭画像

## めじか鮭資源の増大からめじか鮭の普及へ

資料表1は、山形県鮭人工孵化事業連合会の大井参事から送って頂いた、山形県職員OBで遊佐町めじか地域振興協議会の学識経験委員である桶田陽治様より提供いただいた資料から、関連部分を抜粋して広域連携の経緯をまとめさせていただいたものです。この資料より、行政・研究機関の支援のもと、“めじか”の生態が解明され、北海道の漁業者と山形県のふ化事業者の想いが繋がり、多くの方々の協力のもこの事業が発展してきているのが解ります。

表1 サケ広域連携についての経緯

年月	事柄
1969年(昭和44年)11月	“めじか”母川調査のため北海道稚内水産試験場が11月9・20日に“めじか”50尾を標識放流。内、最も多い9尾が12月中・下旬に山形県月光川で再捕された
1975年(昭和50年)11月	北海道宗谷支庁長・雄武町長・雄武漁協組合長等が“めじか”を獲っているお礼に山形県へ来県、月光川水系のふ化場(箕輪・柗川・高瀬川・月光川)を視察
この間、月光川水系のサケ資源が減少し交流が休止状態に(平成10年代に回復して現在に至っている)	
1997年(平成9年)6月	サケマス増殖懇談会「メジカを増やすには道県の枠を超えた増殖事業の展開」と題して山形県水産試験場笠原裕氏が講演
2007年(平成19年)7月	さけふ化放流事業に係る研修会「山形県月光川水系サケ増殖事業勉強会」と題して日本海区水産研究所清水勝課長が講演。サケ増殖に関して広域連携を図るために、“めじか”を漁獲している北海道オホーツク沿岸の定置網漁業者との交流を提案
2007年(平成19年)10月	山形県孵化連・箕輪・柗川鮭漁業生産組合が雄武漁協・枝幸漁協の定置部会と交流。“めじか”を共に増やす方向で同意
2008年(平成20年)2月	北海道枝幸漁協が箕輪・柗川ふ化場を視察、交流会開催
2008年(平成20年)10月	本州鮭鱒増殖振興会の「メジカ」研修会。本州鮭鱒増殖振興会・日本海区水産研究所・山形県等本州側7県ふ化事業団体が雄武・枝幸・沙留・紋別の各漁協と交流
2009年(平成21年)6月	北海道北見管内増殖事業協会が箕輪・柗川ふ化場を視察
2010年(平成22年)2月	北海道定置協会宗谷支部(稚内・宗谷・猿払・頓別・枝幸の5漁協)・宗谷管内さけ・ます増殖事業協会・(独)水産総合研究センターさけますセンター(徳志別事業所)が箕輪・柗川ふ化場を視察・懇談会(時田遊佐町長と佐藤県会議員同席)
2010年(平成22年)10月	山形県鮭ふ化事業関係者の北海道オホーツク沿岸視察研修。山形県孵化連・柗川鮭漁業生産組合・本州鮭鱒増殖振興会・山形県定置網漁業組合・遊佐町長・サケ流通加工業者が北海道宗谷並び北見管内さけます増殖事業協会・漁協関係者・枝幸町長と意見交換、交流を深めた
2011年(平成23年)2月	北海道雄武漁協・猿払村漁協が箕輪・柗川ふ化場を視察、懇談会を行う
2011年(平成23年)2月	朝日新聞に「北海道と遊佐 サケが結ぶ メジカ増殖で漁協交流」「みちのく魚風土記 よりよいサケの稚魚放流を」として交流記事が掲載
2011年(平成23年)10月	本州鮭鱒増殖振興会の研修事業として尾形会長が道東(紋別市・斜里町・標津町)を視察、北海道北見管内さけます増協の今井会長・横内副会長・阿部運営委員長に山形県ふ化事業の視察を要請し快諾された
2012年(平成24年)1月	北海道新聞に「北海道・東北考 ブランドサケに託す」として広域連携の取り組みが紹介
2012年(平成24年)2月	北海道北見管内さけます増殖事業協会・北海道オホーツク振興局・北海道区水産研究所・本州鮭鱒増殖振興会が山形県へ来県、山形県議会・遊佐町・酒田市・孵化連等と意見交換会と交流会を開催
2012年(平成24年)4月	山形県鶴岡市イタリア料理店アルケッチャーノ奥田シェフによる「メジカを食べる会」が開催される。山形県・遊佐町・水産加工流通関係者・北海道紋別漁協飯田定置部会長が参加
2012年(平成24年)6月	山形県孵化連会長名で北海道宗谷管内・北見管内さけます増協会長あてに「めじか地域振興協議会」への参加を文章で要請
2012年(平成24年)6月	「海洋立国と日本」フォーラムが遊佐町にて開催。“めじか”をテーマに資源保護や地域活性について話し合われた。パネル討論に時田遊佐町長・尾形柗川鮭組合長・横山参議院議員が参加
2012年(平成24年)8月	(社)水産資源保護協会の巡回教室「メジカ広域的サケ資源を考える」講習会が遊佐町にて開催。「最近のサケ資源の動向について」と題して北海道大学大学院水産科水産学研究所帰山雅秀教授が講演

年月	事柄
2013年(平成25年)1月	山形県柘川・箕輪鮭漁業生産組合等が北海道紋別市・枝幸町等のサケ関係施設を視察し、北海道宗谷管内・北見管内さけます増殖事業協会との研修交流会に参加
2013年(平成25年)1月	山形県遊佐町めじか地域振興協議会設立総会が開催
2013年(平成25年)2月	北海道宗谷管内さけます増殖事業協会が山形県箕輪・柘川鮭漁業生産組合・山形県庄内総合支庁水産課・遊佐町と意見交換会、懇談会には遊佐町副町長・町議会議長・酒田市市長・山形県漁協理事も参加
2013年(平成25年)4月	「奥田シェフとめじかを楽しむ会」が(有)新栄水産高橋社長・アルケッチャーノ奥田シェフの協力のもと、遊佐町めじか地域振興協議会設立記念事業として開催
2013年(平成25年)5月	山形県柘川鮭漁業生産組合が稚魚放流状況及び施設視察研修のため、北海道北見管内さけます増殖事業協会の事業所を視察
2013年(平成25年)7月	山形県定置網漁業組合の要請を受けて、山形県が「やまがたサケ資源勉強会」を開催「サケの一生」と題して日高管内さけます増殖事業協会常務理事清水勝氏が講演
2014年(平成26年)3月	北海道北見管内さけます増殖事業協会が設計事務所を帯同して山形県遊佐町へ来町、柘川鮭漁業生産組合の要請を受けて、北海道のふ化技術を導入した施設とするため、北見管内さけます増殖事業協会増川常務が現地指導を行う。交流会には岸宏一参議院議員・佐藤藤彌県議会議員も参加
2015年(平成27年)2月	山形県主催で山形市内の「やまがた庄内浜の魚応援店」を対象としてめじか試食会が行われる
2015年(平成27年)4月	北海道北見管内さけます増殖事業協会飯田副会長を迎えて、さけ(めじか)ふ化増殖事業交流会が行われる
2015年(平成27年)6月	ふ化施設視察・ふ化技術講習・柘川ふ化場改築設計協議のため、遊佐町鮭組合・遊佐町・山形県の関係者が北海道北見管内さけます増殖事業協会を訪問
2016年(平成28年)6月	遊佐町議会文教産建常任委員会がサケ増殖事業等視察のため北海道北見管内さけます増殖事業協会を訪問
2016年(平成28年)8月	北海道宗谷管内さけます増殖事業協会が山形県柘川ふ化場を視察、意見交換を行う
2016年(平成28年)9月	第36回豊かな海づくり大会 海づくりフェスタ in 遊佐町にてふ化事業パネルを展示
2017年(平成29年)3月	新柘川ふ化場落成式 水産庁・山形県・遊佐町・北海道北見・宗谷・日高管内さけます増殖事業協会等多くの関係者が出席。サケ広域連携の基地たる新ふ化場の落成が行われる

特に山形県鮭孵化事業連合会と北海道北見管内さけます増殖事業協会並びに宗谷管内さけます増殖事業協会が、秋鮭の作り手として“めじか”の鮭資源を増やすことを実践的に推進してきた功績が大きいと思います。

平成29年3月21日に行われた新柘川ふ化場の落成式では、水産庁・山形県・遊佐町・山形県漁業関係者等、多くの関係者が臨席される中、北見管内さけます増殖事業協会・宗谷管内さけます増殖事業協会の功績に対し、感謝状が贈呈されました。

北海道と本州の垣根を超えた増殖団体や漁業者の交流は高く評価されており、さけ・ます資源高品質化推進事業にも繋がっています。この広がりや、“めじか”を日本が誇る純国産の高品質な鮭として、海外に向けて発信することも期待されます。

落成式にはNHKワールドTVが2020年の東京オリンピックに向けて、フランス人の撮影監督による4Kの技術を使った未来に資産価値のある映像記録として日本の姿を世界に発信する、『JAPAN FROM ABOVE』の撮影班もきており、2018年8月19日に世界へ向けて放映されました。この映像はNHKオンデマンドサービスで視聴できます。

<https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/ondemand/video/3004511/>

(JAPAN FROM ABOVEで検索しGifts from the Mountains編が49分の放映の17分20秒辺りから尾形組合長が登場します)

近年は北海道と山形県の関係者が相互に行き来し合い、毎年のように交流会が行われています。その中でこの広域連携が浸透し広がりを見せています。

平成30年7月には、山形県遊佐町めじか地域振興協議会の皆様が北見管内・宗谷管内さけます増殖施設視察に来られ、枝幸町でも懇談会が開催されました。この交流の切っ掛けを作られた、現日高管内さけ・ます増協専務である清水勝氏・めじか応援団のマルハニチロの圓谷猛氏・山形県佐藤藤彌県議員・遊佐町時田博機町長・北海道三好雅道議会議員・枝幸町村上守継町長・現場でふ化事業に携わっている方々・枝幸の漁業者の方々などが参加して盛大に開催されました。宗谷管内さけます増協須永忠幸会長は“めじか”の稚魚を放流していただいていることに感謝を述べられ、この広域連携の更なる発展を祈念されました。両議員・両町長も祝辞においてこの交流がお互いの地域活性にも寄与することに期待を述べられていました。尾形修一郎組合長もここまでの歩みに感慨にひたりながらも、更なる発展に想いを寄せられていました。

“めじか”の普及に向けての取り組みも合わせて始まっています。

世界を舞台に活躍する、山形県鶴岡市にイタリア料理店アルケッチャーノを構えるオーナーシェフ奥田政行さんは、『食の都庄内』親善大使であり“めじか”の料理を発信してくれる料理人です。めじか地域振興協議会の設立事業として『奥田シェフとめじかを楽しむ会』が開催され、“めじか”普及に一役買ってくれています。

また、テレビ朝日『食彩の王国』（2018年12月1日放送 第757回『サケ』）においても、枝幸漁業協同組合定置部会の協力のもと、北海道と山形を結ぶ友情物語として、“めじか”を通しての絆の深まりとともに食材としての魅力が紹介されました。

この番組の中で、獲る側として枝幸定置部会松谷副部会長は、『ここの沖で“めじか”になって獲れるからありがたい！“めじか”は地元の人にも特別なものだから愛はあるよ！』とのコメントと共に地元料理として“めじか”のしゃぶしゃぶを紹介。山形ではメジカの故郷として山形でもその美味しさを発信していきたいという尾形組合長の想いを地元フレンチの太田シェフが受け止め、“めじか”の身と白子を使って世界の珍味であるフォアグラやトリュフを掛け合わせた素晴らしい料理を紹介。試食した尾形組合長も感嘆していましたが、太田シェフの『“めじか” ぐらい美味しい魚じゃないとフォアグラとトリュフに負けてしまう。“めじか” あっての料理です！』とのコメントが“めじか”の食材としての強さとこれからの可能性を感じさせてくれました。

めじか地域振興協議会では、“めじか”の試食会を地元飲食店の方々や市民を対象に行ってくれています。また、地元加工業者の協力のもと、“めじか”を使った庄内弁当を作っています。

尾形組合長は枡川ふ化場で行われる放流式で参加してくれた子供たちに、“めじか”の説明と共に“めじか”の握り寿司を振舞って、その味を知ってもらう取り組みもされています。

本州の人はもちろん北海道の人でさえ“めじか”のことを知らない方が殆んどですが、北海道と山形双方から“めじか”の魅力が発信されることで、多くの方に人の努力と自然の神秘が作り出すこの素晴らしい鮭のファンの輪を広げて行ければと思います。

## 定置網漁業から始まるめじか鮭資源の利用

日本の沿岸を回遊する秋鮭を漁獲するのは定置網漁業です。

私は日本の定置網漁業を、世界に誇る漁業だと思っています。

漁場が水揚げ港から近く、漁獲過程で魚を傷めず獲り揚げて高鮮度保持を工夫できる漁具漁法です。また、敷設された網への対象種の来遊を待って漁獲するため、乱獲の恐れはありません。生きたまま漁獲される魚には、活魚・活メ・海水氷メ等の処理ができ、鮮度を保持して水揚げされた魚は生鮮出荷や製品加工などに好循環を生み出します。

“めじか”も定置網で漁獲されてから迅速に高鮮度処理をされることにより、

その価値が引き出されます。当社でも船上で活メした“めじか”を鮮度の良い状態で生のまま、セミドレスやフィレ加工をしています。鮮度保持した状態で急速凍結させたものは刺身や寿司などの生食はもちろん、和洋中様々な料理素材として利用できます。



写真6 札幌の百貨店でのエコラベルを貼っためじか鮭 PR 販売(2018年11月)

国際的に持続可能な水産業を構築することが重要とされている中、北海道定置漁業協会宗谷支部では、2014年に日本発のエコラベル MEL（マリンエコラベルジャパン）生産者段階認証を取得しました。2020年の東京オリンピック・パラリンピックへ向けて『持続可能性への配慮』がクローズアップされると思います。国内外の方々へ、環境に優しい定置網漁法で獲れた“めじか”を地元加工業者と連携して提供できる取り組みを行っていただきたいと思います（写真6）。

## おわりに

近年、国産水産物の主要魚種の水揚げが不振であります。

これまでは獲れることが当たり前であった魚が限りある資源であることに気付かされています。特に定置網漁業は資源変動の影響を受けやすい漁業です。地元に戻遊する豊かな水産資源があつてこそ、生産に結び付くのです。“めじか”も実は獲れなくなり、これから先細りしていく資源であると半ばあきらめていました。それが山形県のふ化事業者の皆様と交流を深める中で、これから期待できる資源となる希望が生まれました。このサケ広域連携は回遊魚を対象とする定置網漁業において対象魚種の生態を解明し、継続的に資源の増大・安定・有効利用に向けて取り組むことの大切さを示してくれています。